

## 天狗諸生の乱と那珂町

宮沢 正純

一

幕末の水戸藩に起った「天狗・諸生」の内訌は支配層だけのものではない。私達に身近な郷村の人々を巻き込み、領内にとどまらず全国的規模の大騒動となっていた。村内の人々は対立し、互に自分達の行動を「正義」によるものと主張した。それぞれの立場とは一体どのような事であったのか。具体的にどんな行動に出たか。後世に残した影響は何かなどについて述べてみたい。特に当町域には両派共に参加者が多く、現在もその関係者を知る事ができる。だが歴史的に正確に判断できる情報が伝わっているとは筆者には思われない。理解が行き届かず、間違った伝承や疑問をまねく様な事柄が語られていると思われる。不明確な点をあきらかにし、それらを解明して訂正し、この事件の正統な位置付と性格、関係者の立場を示そうと思っている。その結果、更に今まで隠されていた記録や伝承が明らかになっていき、新たな視点さえも発生することを願った。

やがてこの対立が武力抗争として全国的な軍事行動となると、幕藩体制下の各藩の多くが意外に弱い軍備力であった事を暴露していく。地域の歴史を見る目を変え、全国的視野から「騒動」をながめる事も、事件の分析に必要な条件なのである。

水戸領に朋党が発生するのは、八代藩王徳川斉修の継嗣問題からである。保守的な門閥重臣層は將軍家斉の実子を迎えんとし、中・下土層は血脈の上からも名分上からもその弟敬三郎を押しした。両派の対立が激化するなか斉修の意志との事で敬三郎が襲封し、九代藩主斉昭が誕生した。しかし、この決定がなされる証となった諸記録は、現存する史料を含めて斉昭が擁立された後に明らかにされている。敗れた重臣派に有利な主張の基となるべき史料は皆無に近いという状況である。この点には実は両派の争いの奥深い激しさと共に、勝者は一面のみの記録を残す事ができるといふ実例である。後世の者が、一つの事象を考察する時、基となる史料、つまり残されていた記録類にはある操作がなされたものが多いという事である。

天狗・諸生の闘争の結末は、天狗の勝利に終わり現在もその状態が続いている。残された記録も天狗側に立ったものが圧倒的に多い。だが逆の史料もあり、解釈によつて、史料はより一層活用できる。私達も抗争について考える時、自己の判断をもつて評価したい。その時に参考となる情報的一端にでもなればと思つて以下両派の発生から行動、実態にふれていく。更に、この地方においての両派の参加者とその行動を追い、本格的町史編さんの参考に供せれば幸と思つている。

一一

斉昭は襲封した時三〇歳であった。人生経験豊富なその判断と実行力は充分に先を読んで行われた。幼少より英明の評高く、実際に行つた治政にもすぐれたものが多かった。反面、指導者としては個性が強く、「烈公」の諡がふさわしい行動派で、ブレイントラストと共に歩むというよりは、それを率いて行動した人物であった。

長い部屋住の頃から藩政改革の意欲があつた斉昭自身が、その目的実現の為足元を固めるとして抜擢したのは、現状の保守的藩政に批判を持つていた者達であつた。それは当然中・下土層出身の自分を擁立してくれた人達であつた。彼らが天保期から始まつた藩政改革、いわゆる天保改革の推進役となり「改革派」と称された斉昭派集団となつた。これに反対乃至慎重論をもつて臨んだのが、反斉昭派となる門閥重臣層であつた。郷村においても両派につながる人々が発生し、対立してくる



とは別の形で現存している例が多い。

検地の結果、領地の整備も進んだが当地方では、額田が東、南、北に分村、豊喰が豊喰新田村に、中岡、磯崎が鹿島村となり、一部の地区が入れ換えられ、現在の大字にあたる村々の領域が定まった。

寺社改革についても述べておこう。この改革の協力者へも郷土格が与えられた。この項については神官、修験と僧侶の対立にも及ぶので一括して述べる。水戸領はかつて光國の時にも寺院整理を行ったが、斉昭の時は彼みずから「領内の仏教を無くしはずれ神国とする」意気込みであった。寺院を潰す反面、神宮らを優遇した。寺社奉行の職権も増大し、奉行職に斉昭派の有力者が就任した。僧籍にある者に対して神職は、改革派の一翼をになって追鳥狩にも参加した。水戸領には連という神宮らの結合があった。七連あったそれらの内に当地域では、中台（鈴木竜男Ⅱ安政期）、菅谷（和田力平）は府下連、鴻巣（鷲尾金吾、福田（今瀬長門）、飯田（那地原東之介）が河西連、米崎（海後大和）、堤（多賀野丹後）、額田（白石陸奥）が小沢連であった。追鳥狩の編成は連ごとに異なっていたが、神宮らの結束は固かった。又彼らは各地の郷校の行事に参加し、その力を充分に発展していった<sup>②</sup>。

斉昭ら改革派はその他さまざまな改革を行った。すべてを述べる事は割愛せざるを得ないが、大なり小なりの影響が郷村に及んだ。この改革は急進的に強力に、反対派を押しつぶして進められた。その結果、反斉昭派は結束を強め、弘化元年（一八四四）ついに幕閣を動かし、斉昭は失脚して蟄居・謹慎を命じられた。改革派は後退し、反斉昭派が逆に藩の要職に就き実権を握ると、村々においての対立も逆転し、反斉昭派が村政の実権を握った。

この時に注目されてくるのが結城寅寿に従うようになる人々である。寅寿自身は斉昭に見い出され、引き立てられた。藤田東湖ら斉昭派幹部にも信任厚く、旧家の出という家柄によって出世も早かった。だが改革を進めながらこの政変で彼のみ処罰を受けなかった為、改革派はこぞつてこの事変が寅寿の陰謀によって行われた事と曲解した。寅寿が一部重臣や中間層に人望があった事、一党の指導者たる力量があった事は確かであったが、彼一人でこうした変革を起こせる力も場合でもなかった。嘉永四年に下江戸の庄衛門が郷士になるがこの為かどうか現在不明である。

この弘化元年から、斉昭の宥免運動が始まり、郷村からも江戸へより各方面へ歎願したり（水戸では一般民衆までを含め人々がこぞつて江戸へ出る事を「南上」とか「南発」と呼んだ）、東奔西走し斉昭の為に行動した人々が出た。郷士、神官、村役人層が多かったが、当地方の関係者については後述する尊攘派の人々の履歴のなかで述べていく。

弘化（嘉永期の中頃までの水戸藩内の抗争は、斉昭にも阿部正弘のような幕閣内の理解者がいたし、又同派あげての運動の結果、朝廷を始めとする各方面の援助もあって、やや斉昭派の巻き返しを示しつつ小康状態を保っていた。この時、大きな変動を与えたのが、外国勢の日本接近であった。ペリー来航を頂点としたこの時勢の変化は、再び「水戸の隠居」とその「攘夷論」を必要としてきた。斉昭は幕政へ参加し、攘夷を主張した。勿論水戸藩庁も斉昭派Ⅱ尊皇攘夷派が再び要職を占め、その変化は村役人まで及んだ。反斉昭派は厳しく処罰され弾圧を受けるが、斉昭派への反発も増大し、人々の心に深い傷跡を残していった。郷村における対立も、それはお互いに許す事のできない政争であり、負ければ日陰者の生涯であった。

斉昭もやがて「攘夷」の不可能を悟り、幕政から身を引き、主力を「水戸」の改革にそそぎ、幕府補佐と攘夷実行の為として強力に武備の充実を目論み、より一層反対派を押しつけた。更に安政二年（一八五五）に起った江戸中心の大地震は水戸藩にも大きな打撃を与えた。「両田」の圧死である。改革派—尊攘派の中心的指導者で斉昭の良き同志であった藤田東湖と戸田蓬軒は、「両田」と称され、隠健な考えの為に反対派にも人望があった。この機に反斉昭派は勢力の盛り返しを計る

と、斉昭派はこれに対応、憎しみの処分を行った。

まず結城派の人々に対してそれは下された。すでに寅寿は嘉永六年に不忠不義とされ、長倉の松平へお預けとされていた。子息も蟄居していたが、安政三年には一味の武士層が処罰され、引き続いて郷村の人々へと及んだ。

郷村関係者には同年正月二十七日に処分が発せられた。鷲子の薄井一族、馬頭の星、北条、大子の増子民部、大宮の立原伝十らで、いずれも地方における豪商、豪農、有力者であり藩重臣層と結びついて強大な力を持っていた。当地方ではその一人に寺門登一郎がいる。彼ら一同へは入牢、揚屋入、同役預けなどが達せられ結城派一味として藩政より追放された。この動きはさらに続き、四月に入ると寅寿らへ死罪が命じられ、翌四年八月まで武士層は次々と処刑され、郷村勢へも八月一日に、身分剥脱、追放など重い処分が出された。こうして政争で負けた人々への弾圧が、もし再び逆の立場になれた場合、強い反動として尊攘派へ返っていく事は十分に予測された。

世情も攘夷実論が先行した。開国問題と將軍継嗣で斉昭と井伊直弼が対立、大老就任した直弼の方針を斉昭らは「違勅」と攻め、やがて朝廷まで巻き込んだ騒動は、「安政の大獄」をまねいた。この時にも、斉昭の為として水戸領内から各層の人々が江戸を始め京都や各地を奔走した。この動きは結局桜田門外で井伊直弼を暗殺するまでに至った。水戸の尊攘派は長州藩士との間に「成破の盟約」<sup>3)</sup>を結び、東禅寺事件、坂下門外の変など積極的に動き廻った。

朝廷も攘夷論であった。文久に入ると將軍へそれを強く迫るようになり、三年には將軍は水戸藩主徳川慶篤らを率いて上京、攘夷の祈願が行なわれた。「攘夷実行」は朝幕の一致した方針となり、各藩の尊攘派もその対応の準備を進めた。特に水戸は郷村の尊攘派迄もいよいよ時期到来として、多くの人々が行動を始めた。

しかし、八月一八日、宮中クーデターが公武合体派によって実行され、尊攘派は大打撃を受けた。長州藩は孤立、天誅組や但馬生野の変が起こり、幕府以下各藩が攘夷を行うという事が不確定なものとなつていった。この結果、ついに独自に攘夷を実行するとして挙兵したのが、水戸の尊攘激派の人々であった。

水戸領内の郷校、内でも小川、潮来、湊三校に屯集していた有志が、藤田小四郎、竹内百太郎らに率いられ、水戸町奉行の田丸稻之右衛門を押し立てて元治元年三月に筑波山へ挙兵、広く有志を募った。郷村から参加する者、全国から集まる者が増加、約一千名にもふくれ上った。幕府がこの動きに各藩へ追討を命じる頃、水戸表の重臣層は、郷民まで含めて八百名余が江戸へ上り、主力となつた弘道館学生ら(諸生)の名からやがて「諸生」と称されていった。一行は江戸で藩主に謀り、次々と要職を占め、筑波勢追討を決定した。筑波勢は「天狗」と名乗ったが、もともと尊攘派が「天狗」とは義勇のある者が超人的行為も行う正義の名称」として使用した名である。

この時、水戸に残っていた尊攘派は、鎮・激両派ともその主力であったが、江戸屋敷の政変に驚き、それぞれ手勢を率いて南上した。榊原新左衛門、武田耕雲斎、鳥居瀬兵衛ら重臣の各隊、郡奉行の小田部幸吉、村田理介、真木彦之進、寺社奉行の中山民部隊など、それぞれの隊はその一族、支配下の者、同調者、倍臣を率いていた。郷村の尊攘派はこの時大部分が南上した。筑波挙兵、南上組、在村組などこの地方の尊攘派は後に一括呈示する。

諸生を追って南上した天狗が、江戸の水戸藩の政庁を再び握る頃、筑波勢と追討に出た諸生の市川三左衛門隊は幕府の正規軍と共に合戦を始めていた。この時負けた諸生が水戸へもどり、天狗の家族を捕えだすと挙兵隊は攘夷実行の前に水戸表の奪還を目論んで山を降りた。領内は大混乱となつた為、慶篤は名代として支藩宍戸藩主松平大炊守頼徳を平定の目的で水戸へ遣わした。これに尊攘派の各部隊が従つたので、目代を大将とした天狗軍、幕府の命によって行動する諸生軍が対立していった。両者はそれぞれ主命に従っているという自負があった。自己の立場に正統性があると思

つたことで、両軍の合戦は激しかった。

### 三

町内旧村における尊攘派の人々の様子を示すと次のように纏められる。まずこの表記方法を示すと、村ごとに、出身者、明治七年に居住していた者、村内に関係者がいた者をあげた。現在知られている文献によつて関係者と推測され得る者まで含めて一括した。勿論今後の調査によつて、その出身等が不明なものが明らかになる反面、同一人物が重複していたり、当町に無関係だった者が出るかもしれない。更に村によつては新たな尊攘派が存在していた事も明確になる。この資料はそのたたき台ともいえる。履歴、行動、業績、格式(身分)、生死の別等々も今後一層詳細にされていくと考えられる。

まず姓名は知り得る事のできた総てを記した。出典によつて異なっていれば、同一人と思われる場合も入れた。元治元年以前、尊攘派としての行動があった場合はそれを示した。弘化年間、安政年間の南上、奔走とは、斉昭の処分に対しその宥免を願つて行動した様子を示した。文久三年に水戸藩主徳川慶篤が、將軍に從つて京都へ上るが、その時同行した郷村の人々があった。上京し京都へ留まった人、帰国した人、江戸まで帰つた人などその行動の別を示した。元治以後は、筑波へ挙兵した場合と、南上した場合については誰に從つたかを明記した。その後、尊攘派の大部分は松平頼徳に從つて那珂湊へ屯集、以後各地での戦闘の実態と戦死者、脱走者、捕縛された者などを示した。特に郷村出身者で結成され、大津彦之進に從つて県北方面平定を目標んだ集団があったが、湊―助川―太田―中染などの各地方を廻る内、合戦で犠牲になつていく者をあげた。戦況が尊攘派に不利になると、頼徳が降伏するので、その後が続いた者が多数あった。その関係者がどこに預けられたかを示した。初めに高崎、佐倉、関宿の三藩に預けられ、一月一五日までに二二藩に分預された。高崎藩は銚子が領地であつたので高崎と記さず銚子とした。その町内出身者に関した大名は次のとおりである。

上州高崎	松平右京亮	八万二千石
下総関宿	久世鎌吉	四万八千石
三州西大平	大岡越前守	一万石(これも飛地の島野村預)
下総高岡	井上筑後守	一万石
武州川越	松平大和守	十七万石
上総請西	林肥後守	一万石
下総佐倉	堀田相模守	十万石
上総大多喜	松平弾正忠	二万石 <sup>(4)</sup>

さらに降伏した一派と別れ、武田や藤田と共に、当時京都にあつた一橋慶喜に歎願の為に西上した一隊があつた。しかし一行はその志をとげられず越前で金沢藩に降つた。敦賀に幽閉されて刑死、獄・病死、預けなど各様の処分があつた。各藩に預けられた者達も同様の扱いをうけていく、佃は江戸の獄、赤沼は水戸の獄である。救とあるのは赦免され帰国(村)が許された者。戦死、獄死は文字どおりであるが、病死と獄死のちがいは原本によつて区別したのみである。脱走とあるのは身柄を隠す為、追手を逃れる為等の行動であつたろう。

更に、明治維新後における行動も示した。諸生を追つて奥州白川、北越への出兵、諸生を迎えての弘道館での合戦から、銚子、八日市場方面への追討、最後は函館まで出陣した例を示した。数字は出典の別である。①「勤王殉国事蹟」。②『天狗党殉難者名簿』(その中での出典は示してない)。③『士民諸侯御預姓名録』。④は那珂町中台、石川家史料である。<sup>(5)</sup> ( ) は身分を示したが、格式の明確と思われる者にかぎつた。身分に関しては、充分に調査がなされず今後を期したい。

村で切腹、村から戦場へ出向く者なども示した。当町内での尊攘派の行動はこうしてほぼ明らかにされつつある。その全体的な行動の中で、郷村出身者の位置や思想などを述べる事は可能となっている。

本米崎

稲川弥八 筑波拳兵―敦賀(病没)①②の稲川大介と同一人か

佐川礼一幸蔵 居村―湊―銚子(赦)―白川―弘道館①

関謙之介光貞 小田部と南上―湊―関宿―請西(赦)①

田口所一郎惟昇 小田部と南上―湊―銚子(赦)―白川―弘道館①

福池謙助謙直 小田部と南上―湊―銚子―島野―佃(病没)①③では一時関宿預

福地理衛門敏慎 弘化年間南上。元治、村―湊―銚子(赦)―白川①(郷土)

海後大和宗弘 敦賀(刑死)②(神宮)

大岳大助(太介) 敦賀(刑死) 大出大介ともあり②

海野剛蔵 関宿―高岡③(神宮)

海後弃蔵 関宿―吉岡③(神宮)

大介(大分新介) 敦賀(刑死)④

向山(未詳)

横堀

中庭直三郎 武田と南上―湊―敦賀(刑死)①②では国分新太郎に従うとあり

堤

多賀野義博 弘化年間南上。元治、居村にて斬死①(神宮)

多賀野美濃博知 義博の子、弘化・安政年間奔走。元治、中山民部と南上―湊―関宿―高岡(病没)①(神呂)

杉

木村辰吉(獄死)②

額田北郷

岩佐登十郎一貫 浅田富之允と南上―湊―銚子―佃(病没)①

寺門治平教保 弘化・安政年間南上。元治榊原と南上―湊―水戸城下で捕、親類預け―白川―弘

道館①

中島兵部又法 榊原と南上―湊―関宿―高岡(病死)①

額田南郷(未詳)

額田東郷

助川千之允敬政 下総関宿出生、桜井伊兵衛長男。小池千太郎と南上―湊―佃(赦)―白川―越

後①③では一時佐原―長瀬預、小池金(干) 太郎家来とあり

秋野源兵衛 林正徳に従い敦賀(刑死)②

額田のみ

福田弥一郎(獄死)②

弥市郎 捕(赦)③

門部

小田倉清介隆資 榊原と南上―湊―中染―島で捕(獄死)①(大津に従うか)

小田倉捨吉隆義 隆資の弟 榊原と南上―湊―銚子―川越(病死)①

楠見長右衛門長信 榊原と南上―湊―和久で捕(獄死)①(大津に従うか)

中井川梅吉(八郎) 秀昭 安政五年南上。元治南上―湊―大津に従い助川、中染―棚倉で捕―赤

沼（獄死）①  
 中井川時之介（雅楽之介）篤孝 安政年間南上、文久三年上京―江戸。元治江戸―湊―潜伏す―  
 白川―弘道館―八日市場①  
 小田倉普介 湊より脱走③  
 鹿島

井坂善吉（久蔵）通寛 安政年間南上、文久三年上京。元治南上―湊―関宿―請西―佃（赦）―  
 白川①  
 中崎亀次郎（貞介）隆憲 箕村出生、岩間莊衛門次男。安政年間南上。文久三年上京。元治湊―  
 敦賀（刑死）① ②では田丸稻之衛門に従うとあり  
 箕川丑吉（新八）義忠 武田と南上―湊―敦賀（禁鋼―赦）―越後①  
 赤穂志定吉 佃（獄死）②  
 高畑謙介 湊―助川③（大津に従うか）  
 中崎左馬之介 元治年間戦場より脱走③

## 南酒出

今瀬来目之介清穆 福田村出生。安政年間南上。元治上京―明治元年帰国―白川①（神宮）  
 片岡仙太郎喜衛門 元治、居村にて諸生派に囲まれ切腹①  
 片岡仙太郎慶七 喜衛門の子。武田と南上―湊―西上し敦賀―水戸（獄死）①  
 近藤寅之介諦諄 南上―湊―塩ヶ崎で捕（獄死）① 修験。②には神宮、大乘院光政諦諄とあり  
 近藤軍太郎 諦諄の子。南上―湊―大津に従い助川で捕（獄死）①（修験）。②には神宮、近藤  
 光次とあり

近藤弁之介 部田野（戦死）②（修験）  
 池島源右衛門 戦場より脱走③  
 池島東七郎 戦場より脱走③  
 池島八郎 助川参戦③  
 池島丈介 助川参戦③ 酒出のみ  
 池島左衛門 助川参戦③ 酒出のみ

## 北酒出

鈴木造酒蔵（喜兵衛・純明）穂積 梶清治衛門と南上―湊―銚子（赦）―白川①  
 莊司文左衛門 小菅村（戦死）②  
 鈴木勘次郎 湊（戦死）②  
 高崎新兵衛（宮崎・高島・新助・莊三郎など） 敦賀（刑死）②  
 新介（高崎新介） 敦賀（刑死）④

## 酒出のみ

啓七（片岡啓七） 敦賀―水戸④  
 豊喰新田（未詳）  
 西木倉（未詳）  
 東木倉

後藤圭太郎（雄三郎）雄 元治元年四月上京―明治元年帰国―白川―越後①（郷土）  
 中台

石川滝三和為 青柳出生 明治元年馬頭―弘道館―函館①  
 寺門晋一郎暁正 飯田出生 明治元年弘道館―八日市場―函館①  
 寺門誠兵衛行道 明治元年弘道館―函館①

山田孝衛門行敬 明治元年弘道館—函館①  
後台

海野長二郎儀孝 真木彦之進と南上—湊—関宿(病没)①  
鴨志田栄次郎守忠 林五郎三郎と潮来屯集—湊—西上し敦賀(赦)—白川①  
小阿久津欽之介欽吾 鳥居瀬兵衛と南上—湊—佐倉(赦)—白川—北越①(修験)③では栗田  
八郎兵衛家来とあり

鈴木重衛門知重 南上—湊—水戸(戦死)①  
鈴木次郎左衛門敏信 元治元年四月上京—明治元年帰国—北越①(郷土か)

塙鉄太郎正忠 水戸城下出生 真木と南上—湊—佐倉—大多喜(赦)①

増子次衛門義利 安政年間南上。元治南上—湊—合戦中捕親族預—慶応二年上京—明治元年帰国

—白川—弘道館①

蔵之介 西中根で捕③

菅谷

小宅三左衛門住 文久三年上京—明治元年帰国—白川—弘道館—八日市場①(郷土)

川又新蔵 岩間で捕—笠間—真岡(刑死)①

柏村勝三郎義長 敦賀—水戸(獄死)②

加藤勘七為義 銚子(獄死か)②

勝次郎(獄死)②

勝衛門 敦賀(預)④

辰吉 敦賀(預)④

福田

鈴木主税、田中に従う—棚倉(刑死)②(神官)

飯田

快心 銚子—江戸(獄死)②(僧侶)

鴻巣

会沢恒雄(寿貞)徳善 安政年間南上、文久三年上京—江戸。頼徳に従い湊—関宿—佃(赦)—

弘道館—八日市場①(郷医)

秋葉雄四郎(久三)義国 安政年間南上、文久三年上京—江戸。頼徳に従い湊—銚子(赦)—弘

道館①

小野瀬新次郎新左衛門 江戸—湊—助川から脱走—上京。明治元年帰国—白川①

河井甚蔵 六月江戸—上京。明治元年帰国—弘道館①

木村熊吉富重 南上—湊—戦場で捕直後赦帰村—弘道館①(神宮)③では脱走

豊田彦之亟重則 田丸に従い湊(戦死)①

海野徳之進 小川源六郎家来 佐倉(赦)③

大内政平 銚子預③

会沢常(恒)夫 関宿預③(郷医)

先崎半七 戦場より脱走③

戸崎(未詳)

下江戸

小貫儀十郎吉高 南上—湊—佐倉—佃(赦)—北越①

小貫寅吉(新七)通行 南上—佐倉—佃(赦)①

小貫栄什清明 弘化年間南上—安政二年江戸(病没)①

- 小貫藤蔵東 弘化年間奔走。南上―湊―関宿―佃(赦)①  
 小貫善兵衛道房 南上―湊―関宿(病没)①  
 齋藤且之允(園介) 道照 南上―湊―佐倉―佃(赦) 白川①③には永岡勇次郎家来とあり  
 小貫仁兵衛昌蕃 真木と南上―湊―小泉(戦死)② (郷土の子)  
 小貫忠蔵 銚子―川越③ (南郡吏)  
 小貫藤蔵 関宿③  
 三代松(斎藤三代松) 敦賀―彦根(預)④  
 田崎  
 木田伊豫之介政由 水戸(獄死)② (神宮)  
 大内  
 秋山為之介惟善 文久三年上京(病投)①  
 秋山吉左衛門信敏 南上―湊―銚子―関宿―佃(病没)①  
 戸  
 檜山吉郎兵衛卓辰 関宿―佃(獄死)②  
 金沢要人一永 田丸に従い敦賀(刑死)②

これらの人々は、現在の所判明した分である。郡別図に旧村ごとにまとめて人数のみ記して  
 いた。今後この数は増加すると思われる。

#### 四

次に当地方の諸生について述べておく。筑波拳兵後の尊攘派は「天狗」として居村を出る者が  
 続出し、残った者はわずかであった。武力抗争が本格化するにつれ、多くの領民は当時の藩政担  
 者となった諸生の命に従ったので、形式上は諸生派民衆勢力となっていた。七月頃には村々に「評  
 定所詰合諸生」の名をもって次々に達しが届くようになる。特に、野口郷校に屯集した田中愿蔵  
 隊は天狗各隊中で、略奪、粗暴などの「悪名」が高かったため、この地方の村々はそれに対抗する  
 必要もあつた。幕府の命も、出張している田沼総督を通じ、水戸藩庁から布達された。概して述  
 べれば村役人、郷士らは村民を率いてその幕命に従っていく事になる。

諸生派の組織は、本隊、先ノ一備、先ノ二備から成り、本隊中の一番組は太田守備が重要な任  
 務であつた。郷村の勢力は、水戸城下詰、太田郷校詰、居村守備隊、実戦隊などと分けられ、それ  
 ぞれ独自に行動したり、諸生各隊に付属したりして行動するなど様々な形態がみられた。時には近  
 在の郷士の指揮下に入ったり、又集合地の別によって役目が振り分けられ、指揮者も一様でなかつ  
 た例もある。村々でその行動は異なり、個人的にも合戦場で徴発される場合もあつた。

この地方においては、「鯉淵勢」「河和田勢」「薄井隊」「馬頭勢」のように、村々が連合し集団と  
 しての行動をとったかどうか現在まだ不詳である。水戸城下詰と太田詰とはどこで分けられていた  
 のであろうか。太田に詰めた郷民は、郷士級の指揮を受け、県北中心に活躍し、水戸城下において  
 は、諸生本隊に従っていたと想像される。九月五日天狗勢に焼かれたという常福寺の合戦に関連し  
 た史料の発掘があれば、少なくとも額田周辺での村々の実態はより明確なものとなる。

現在、当地方の諸生派民衆の姿を示す史料は皆無に近いが、今後も同様とは思えない。

最後に、当地方の「結城派」だった寺門勢について述べておこう。寺門登一郎については、すで  
 に筆者は触れた事がある。<sup>(7)</sup> 彼を「額田の阿弥陀寺の門前にたむろする無頼の徒でたまたま天狗騒動  
 に手下を率いて参加し、兇悪で惨酷なふるまいの人物」というような記録と伝承のいくつかに対し  
 て疑問を提出し、正確な位置付けをしたと確信している。一応整理しておく。

まず登一郎の出自について。額田村の村役人を勤めており、水戸藩の保守派、結城派と強いつながりが有った事から、資産もあり、人脈も各村々での有力者と肩をならべる格式を持ち得る家柄であったという事、これはすでに前述したいくつかの例で明確であろう。

ついで安政期、結城派一味として郷村関係者も処罰されたが、登一郎への処分は次のようであった。

安政三年正月二十七日 於評定所

入牢 額田北郷百姓 登一郎

四月二十五日

出牢、村預け、此者五月三日又々入牢

登一郎

安政四年八月五日

額田村百姓 登一郎

右之者谷田部藤七郎へ相固不束之所行有之付江戸水戸

御構追放申付候条重而御構之地江於立入ハ嚴重可申付

旨可申渡もの也<sup>(8)</sup>

これによると、彼の安政期の行動が推定されてくる。すでに当時登一郎は江戸にあって、藩の重臣層と一味になっていた事になる。時勢の流れにおいて、先を見る事ができた人物と思われる。安政の大地震に関して、郷村から各派各層の人々が江戸へ登っているが、登一郎もその機会をとらえて江戸へ出たと推定されるが、今の所これを論証する物はない。

結城寅寿が松平屋敷へ預けられた後は、一派の谷田部藤七郎の命によって行動していた。だが、その後元治元年に登一郎が再登場してくるまでの行動は不詳である。額田で監禁状態であったのか、どこか他の地で逼塞していたのか、いずれにせよ再起の機会を待っていた。後世の記録にその部分が欠けているのは天狗が勝利者となった事による。又この期間の長く厳しかった反動が、元治期の登一郎の行動を、強大にした原因で、尊攘派への敵愾心は、「負けられぬ」という気概となり、戦場での活躍がめざましかった。後世の伝説的な行動もその面を強調し、やがてゆがめられて伝わっていった。

登一郎が太田へ出陣し、周辺の郷民を率いての行動は拙稿「幕末水戸藩闘争における諸生派民衆兵の動向」(『茨城県立歴史館報』十二号)を参照していただきたい。彼の明治期の行動も同様である。

以上のように、天狗にくらべ諸生の調査、研究がおくれている。これが「那珂町史」によって正しく分析されていく事を楽しみにこの稿をおえたい。

注

(1) 水戸藩の郷士制は、古くは佐竹家の遺臣や土着の豪族に対して処遇された。中期には豪農、豪商が藩への献金によって郷士に取り立てられた。さらに天保には、検地、寺社改革などの功績によった。その後は、天狗・諸生共に自派への貢献度によって格式が与えられたので、その数も膨大になっていった。

(2) 連については、瀬谷義彦氏「水戸藩郷士の史的研究」を、又幕末期の彼らの活動は今瀬昭夫家(馬頭町健武)の「御用留」に詳しい。

(3) 万延元年八月、長州藩の桂小五郎らと水戸の西丸帯刀らの間で結ばれた密約。「丙辰丸成破の盟約」と称された。水戸が「破」的行動を行い、その後長州が動いて幕政改革を「成」という事。水戸はその為、東禅寺事件、坂下門外の変などを起した。元治には、すでに長州の藩論が変

- わり、水戸藩と同一の道を進むことはなかった。
- (4) 天狗勢が各藩にお預けとなったが、その集団にはあるまとまりがあったと思われる。身分、出身地などの別である。
- (5) 「勤王殉国事蹟」は東京大学史料編纂所蔵。同類のものは国立公文書館の「殉難死節履歴」がある。「水戸藩死事録」は佐々木克校訂・解題の同朋舎本。「天狗党殉難者名簿」は小田鉄三郎者。「石川家史料」とは、那珂町中台の石川英夫氏蔵「慶応元年乙丑三月廿五日武田伊賀以下越前敦賀裁決之筆記」である。石川家史料は、「水戸藩史料」の引用文献を訂正できる、良質の史料である。
- (6) 「鯉淵勢」は水戸領鯉淵村を頭村とし、近在五〇数ヶ村が連合した勢力。自衛団より発生し、やがて戦闘集団となっていく。「河和田勢」は水戸城近くの河和田村を頭に連合した勢力。「薄井」「馬頭」はそれぞれ結城派郷士が郷民を率いて参加、獵師以下を加えた強力な軍団であった。
- (7) 拙稿「幕末水戸藩闘争における諸生派民衆兵の動向」(『茨城県立歴史館報』十二号)
- (8) 小宮山南梁「南梁年録」十六卷、二十卷

## 〔付記〕

本稿執筆後、大子一高教諭の高橋裕文氏(那珂町史編さん執筆委員)と「天狗・諸生」の郷村出身者について話し合う機会があった。氏から町史編さんの調査中、額田の「安政三年額田北郷軒別書上帳」(寺門保治氏蔵)に寺門登一郎の妻は水戸藩先手同心、安新五兵衛の娘であるとの記載を発見された事を伺った。安政三年正月二五日結城寅寿と共に入牢を命じられた者に先手同心安新五兵衛(安栄八郎とも加筆されている)がいるが、正にその人物ではないだろうか。とすれば、登一郎が結城派に加入するのは義父の縁による所が大であったことは容易に推測される。更にこじつけるのと安政元年から先手同心頭は友部八太郎熙正で大沼定詰となっていた。彼は諸生派の重鎮となっていく人物である。結城一味として弟八五郎養正と共にこの時やはり処罰されている。登一郎が水戸藩士のもとへ親しく出入し、特に「〇〇テッペイ」と称した家と交際があったとされている(子孫寺門登志氏談)が、八太郎の嫡男は「鉄吉」と称した。一つの推理としてこんな事も考えられるのではないかとおきたい。今後、高橋氏の正確な研究成果の発表がまたれるが、情報を快よく伝えて下さったことに感謝の意を述べておきたい。

(茨城県立歴史館県史編さん室)